

目的 第三報においては第一報・第二報と同じ目的で、福祉先進国の一つであるドイツと、それに隣接するルクセンブルクにおいて調査を行った。

方法 1988-'90, '92-'93年にドイツ・ハイデルベルク市において調査した。1991-'93年にはルクセンブルク市の高齢者施設を訪問した。ハイデルベルク市ではハイデルベルク大学老人学部、ハイデルベルク市役所老人福祉課、高齢者施設を訪問。老人学の研究の動向、行政における福祉施策、高齢者施設の現状及び動向を調査し、更に施設入居者および在宅の高齢者に面接し、生活歴および現在の生活などについて質問した。ルクセンブルク市においては高齢者施設の入居者に面接、3年間にわたり追跡調査をおこなった。これらを総合して「高齢者にとって意義ある生活をもたらすものは何か」のてがかりを得る。

結果 ドイツの高齢者施設の動向は、施設内での生活状況について自立して暮らすボンハイムの形態を増設する方向に動いており、市の行政も老人学の見地から、高齢者も学び成長することができるとの理念に基づいて、在宅高齢者にさまざまな活動の場を用意し、高齢者の自発的意欲を尊重且つ活力ある生き方への支援方策に動きつつあることが把握できた。ルクセンブルク市の高齢者施設は約100年の歴史を持ち美しい建物と環境のなかで平均年齢85歳の後期高齢者が経済的にも安定した生活を送っている。そこでは基本的人間の尊厳が保たれ、ほとんどが自然死で終わる。積極的生活態度を持つ入居者との面接では生活態度は明るく施設内の役員の役割を持つなど活動的であり、家族・親族との交流が多くの高齢者にとって生きがいの一部を支えていると思われる。